

縄師になるために修行しているけれど、 師匠の指導が常に脱線するので全然上達 しない

縄師の師匠×素直弟子

攻め：師匠

受け：モモ

要素：緊縛、言葉責め、前立腺責め、ドライオーガズム、尿道責め

「お願いします！僕を一人前の縄師にしてください！」

緊縛AVに魅了されて、高校を卒業してからプラプラしていた僕は実家を飛び出し、憧れの縄師の元にアポなしで飛び込んだ。ストーカー並みに住所を調べ上げて突然自宅に訪問したので、僕が師匠と勝手にあがめる彼はとても驚いている様子。驚いたままの彼は、僕が道の途中で贈り物として購入した桃に視線を落とす。しかし、あまりにも急な来訪だ。こんな果物ごときで彼が喜ぶだろうかと、だらだら冷や汗を流して彼の言葉を待つ。

少しの間黙っていると、彼は籠いっばいに詰め込んできた桃をひとつ手に取った。そしてニコリと微笑んで、僕の頭をなでてくる。

「俺の指導は厳しいかもよ？頑張れる？」

「絶対頑張ります！師匠と呼ばせてください！」

「そう。じゃあ今日から君も色事の世界に入るから、源氏名をつけないとね。持ってきてくれたコレにちなんで、モモなんてどう？」

「それをお願いします！」

「そう。じゃあモモ、まずはあがって。外では話せないことをお話しよう」

「ありがとうございます！今日からお世話になります！」

何の計画性もなしに購入したものの、彼は奇跡的に桃が好物だったらしい。美味しそうだねと言いながら桃と僕を交互に見た師匠は、さあ上がってと腕を引いて家の中に招いてくれた。まさか一発で弟子入りを認めてもらえるとは思っていなかったのも、思いもよらぬ展開だ。最悪の場合何度も通う気持ちでいたので、僕は簡単に舞い上がった。

そしてその日から僕は、師匠に修行をつけてもらいながら、縄師への道を歩んでいる。

ただ、修行が厳しいものになるのは覚悟の上で門を叩いたわけだけれど。師匠は僕に縛り方を教える時、なぜか変な方向に脱線してしまって、あまり上達できていないのが最近の悩みだ。

[chapter: 縄師になるために修行しているけれど、師匠の指導が常に脱線するので全然上達しない]

「モモ。今日は新しい縛り方を勉強しようか」

夜の9時過ぎ。大体これくらいから、修行をつけてもらえる時間になる。僕としては日中でも構わないのだけれど、師匠いわく夜じゃないと気分が盛り上がらないとのことで、基本的に指導の時間も夜遅くなることが多い。

夕食を終えて、お互いに入浴も終わったところ、真っ赤な縄を持った師匠は突然家事をしている僕に話しかけてくる。そのタイミングは師匠次第。なので僕は声がかかったら、いつでも話を聞く準備を整えている。今日はどうやら、新しい縛り方を教えてもらえるようだ。復習の日も

あるけれど、やはり楽しいのは新しい技術を教えてもらえる時。一体どんな縛り方だろうと、僕は目を輝かせた。

「はい、ありがとうございます！どんな縛り方ですか？」

「菱縄縛りを試みようかなと思って」

「ひしなわ縛り、というと？」

「写真で見たらこんな感じなんだけど」

芸術的な師匠の縛り方は、マニアックなファンにとっても人気で、過去に2冊写真集が出ている。その中の1冊を開いて、師匠は僕に見せてきた。彼が付箋紙を貼るページに載っていたのは、女性の上半身が縛られている写真で、俗に言う亀甲縛りに見えた。

「亀甲縛りですか？」

「ぱっと見だと似てるね。厳密に言えば違うんだけど、菱縄縛りも亀甲の仲間と言われているよ。縛り終わった時体の真ん中に出てくる空間が、ひし形になるのが特徴だね。亀甲は亀の甲羅みたいに六角形になる」

「なるほど」

とんとん、と女性の体の中心を指さした師匠から、菱縄縛りについての軽い説明を受ける。一見すると亀甲縛りに似ているけれども、確かによく見ると、体の中心を飾る縄の空間がひし形になっていた。美しい裸体は、縄によって強調された胸がとても妖艶だ。師匠曰く王道の縛り方のひとつらしく、緊縛と言ったらこのような形を想像する人は多いと言う。もちろん僕もその一人で、今まで教えてもらったどの縛り方よりも見た目が華やかなそのフォームに興奮が隠せない。

「難しそうですが、ぜひやってみたいです！」

「うん、モモならそう言うと思った。じゃあ早速練習部屋に行こうか」

「はい！」

古民家を改装した師匠の家は、1階が住居空間で、2階がアトリエでありスタジオだ。何個かある部屋のなかで、僕たちは2階の端にある、師匠が縛り方などを練習するアトリエで修行をすることが多い。今回も例にもれず、窓が完全に板で覆われて、外からは見えない8畳ほどの部屋に移動した。

そして、よし練習するぞと意気込んで模型の前に行こうとすると、ここでいつもの声が飛んできた。

「じゃあ早速やっていくから、まずは全裸になってもらえる？」

「うっ」

「ん？モモ、どうしたの？早く抜いで」

指示を受けた僕は、苦い顔で師匠を見つめる。けれども彼は、しゅるしゅると何事もない顔をして束ねられた縄をほどいていた。僕のもの言いたげな顔を見た師匠は、純朴な表情をして首を傾げている。その顔を見て、僕はもっと何とも言えない気持ちになった。

彼は気にしていないようだけれど、僕は正直師匠の前で全裸になることにはためらいがある。でも少し変わっている師匠のことだから、練習するなら当然だと考えていそう。僕も、ここが例えばお風呂場であるとか、ただ着替えるだけのスペースならそこまで気にならない。だけれど薄暗いアトリエの独特の雰囲気の中、縛られる対象として裸になるのは恥ずかしい。

模型もあるのに、どうして僕が縛られる役に回るのだろう。加えて、縛られるだけなら納得できるのに、なぜ全裸になるのだろうという疑問はずっとあった。だから僕はどうしても我慢できず、師匠に聞いてしまう。

「あ、あの、失礼を承知で申し上げたいのですが」

「何？」

「どうして練習では、毎回僕が全裸で縛られるのでしょうか...？」

聞くべきではないかと遠慮していたけれど、僕はとうとう尋ねてしまった。だけれど師匠は、何でもないように縄を綺麗に整えながら言う。

「実際にやってみるのが一番早いから。きちんとした縛り方を知らないのに、いきなり誰かを縛ったら危険だって何度も教えているはずだけど」

「でもその、あちらに模型もありますし、練習ならそれでも」

「...嫌ならやめる？」

けれど僕がぶつぶつと意見をしたら、師匠が冷たい目で僕を見てきた。それで一気に肝が冷えた僕は、すぐに謝って服を脱いだ。

普段の生活では温厚な師匠は、修行の時に限ってとても厳しい。なので返事は基本「はい」の一択で、質問は許されるけれど、不満や文句は許されない。ここでごねたらせっかくの新しい縛り方が教えてもらえなくなってしまうと、僕は黙って全裸になって、師匠の前で正座して、深いお辞儀をした。

「お手間をかけてすいません。本日もご指導よろしくお願いします」

「うん。それじゃあやっていこうか。見えるように縛るから、鏡の前に」

「はい」

なんとか空気をとirmって、修行を続行してもらった。そして裸の僕と師匠は、アトリエにある大きな鏡の前に移動する。その前に腰を下すと、師匠も僕の横に座って、体に赤い縄をかけていく。

「まずは首のところに縄をかける。縛りをきつくしたら首が締まって危ないから、結び目はきつくするけど首周りには余裕をもたせること。その下に3つほど結び目を作って――」

しゅるり、しゅるりと縄を通していく師匠の手さばきは迷いがなく、僕がやるとぐちゃぐちゃになる結び目も綺麗だ。体で覚える約束なので、メモを取ることはできない。目で見ても、聞いて、一回で覚えられるよう真剣に話を聞く。背後を縛るときは横向きになって、コツなどを聞きながら後ろの結び方を見せてもらう。

話しながら、途中僕が質問をしても、10分もするとさきほどの写真集と同じような状態が出来上がっていた。

「はい、こんな感じ。覚えたら簡単にできるようになると思う。均等に縛れるようにならないと綺麗に見えないから、そこは練習が必要かな。空いている時間にあの模型で練習するといいいよ」

「なるほどです。でもこれ、腕は割と自由なんですね」

「そう。亀甲も菱縄も、メジャーな縛り方だけど腕を拘束できない縛り方なんだ。だから俺たちがイメージするような拘束は、腕や足を縛る別の縛りを追加でやっていることになる。この前教えた、手の縛り方を覚えてる？」

「後ろ手縛りですか？」

「うん。背中で両腕を縛るアレね。せっかくだから復習もかねて、組み合わせて縛っていくよ」

部屋の壁から新たな縄を持ってきた師匠は、今度は僕の両手を後ろに回して縛っていく。先に縛った縄と上手く組み合わせて、しっかり背後で腕が固定された。拘束された自分の姿を見ると、確かによく見る亀甲縛りの拘束に見える。

写真を撮った師匠から、詳しい背後の縛り方をもう一度聞いておく。美しく括られた縄は、結び目がガタつく僕のものとは全くの別物だ。まだまだ不器用な自分と師匠の差を見て自信をなくすが、練習あるのみだろう。

しかし、自分の後ろ姿ではあるものの、随分とエロく見える。流石師匠、素人をただ縛っただけでここまで官能的にできるとは。エロいなあとまじまじ師匠のスマホを眺めてしまう。しかし数秒ほど凝視していると、ねえ、と声がかかった。

「今回割と綺麗に縛れたから、もう少し資料用に写真を撮ってもいいかな。あまりモモみたい
に肌の綺麗な男性に縄をかけることがないから」

「それは全然、僕でよろしければ」

「ポージングをお願いしても？」

「体が硬くてもできるものであれば…」

「それじゃあこの写真みたいなポーズとか——」

仕事モードの師匠は、例え相手が僕であっても抜かりがない。なので時間を有効に使って、僕
を被写体にする事も少なくなかった。今回もいつもと同様、縛った後に撮影が始まる。

だがしかし、一応これも修行だと言い聞かせてはいるものの。指示される格好は足を大きく開
いたり、お尻を突き出したりと、大変卑猥なものばかり。全裸の僕の股間も写真に収められて
いるので、恥ずかしい事この上ない。早く終わってくれと頬を染めると、こっちに視線がほし
いと言われたりするの、羞恥心がこれでもかと煽られる。

そして動くたびに縄が食い込む感覚と、少しギラつく師匠の雰囲気にあてられて、徐々に性器
が反応を見せてしまう。勃起しないで静かにいてくれと願うのに、毎度毎度こうなってしまっ
て恥ずかしい。やばい、勃ってきたと体をかがめて足を閉じると、近寄って来た師匠から足を
開かれた。けれども自分の痴態をあまり見られたくない気持ちもあるので、なんとか膝を内側
にして性器を隠す。

「モモ、隠さないで見せて」

「っ、で、でも」

「……、どうしても隠してしまうなら、閉じられないように縛る方が早いか」

「え！？あ、ちょ、師匠！？」

でも僕がモジモジと足を動かしていたら、師匠がぐいっと僕の体を持ち上げた。そのまま腕を
縛ったときに余った後ろの縄が、天井から下げられたフックに通される。次に高さが調整され

て、つま先がようやく地面につくくらいまで引き上げられてしまった。慌てているうちに、自分の力では足を着くことすらできなくなった。つり下げられているので、体重で縄が食い込んで、肌に縄が擦れる感触がリアルに伝わってくる。

しかもつま先だけの不安定な状態で体を支えていたのに、なんと今度は左足を持ち上げられて、軽く曲げた状態で縄が通されていった。そのせいで僕は片足だけで立つことになり、手も後ろで拘束されているので、ぶらぶらと情けなく揺れてしまう。なんとか安定させたいと右足を伸ばしたけれど、あまり力を込めるとつってしまいそうだ。それに、動くほどに縄が締まっていて苦しい。締めあげられると、肌に縄が擦れてくびり出ていく。胸や股間が強調されるこの縛り方で、勃起したまま足も閉じられなくなって、僕は顔を赤くするばかりだった。

「い、嫌ですこんな格好...！降ろしてください！」

「うん、すごくそそる格好だ。綺麗だよ、モモ」

「そっ、そそるって、僕相手に何を」

すり、すり、と太ももやお尻を師匠が優しく撫で始めると、いよいよ空気も怪しくなってきた。おかしい、これは撮影のために足を閉じられなくしたんじゃないのかと、僕は身体を揺らす。けれど揺らせば揺らすほどに縄が食いこみ、足も自然と開いていってしまう。こんな状況でも勃起している自身を、師匠にまじまじと見つめられる羞恥と言ったらない。意見をしてはいけないと分かっているながらも、見ないでほしいと何度もお願いした。

「ゃ、こんな、見ないでください...」

「恥ずかしがるモモの姿は格別に綺麗だね。ああ、その姿が大好きだよ、モモ」

「う、ああっ！」

師匠の手がするんと僕の熱に触れると、密かに期待を滲ませていたその場所は、素直に喜んでいた。僅かな触れ合いなのに、ふるっと震えて大きさを増す。何度も手の背の部分で撫でられ

ると、どうしても息が荒くなった。キシ、キシ、と天井のフックが軋む音に、僕の喘ぐ声と興奮した師匠の息を吐く音が混じる。

「ん、ふ、う、っ、は、あ...！」

「恥ずかしいね。縛られて、少し触っただけでこんなに硬くして」

「ふっ、う、すいませ、ん、っ、も、許して、くださ...」

師匠から卑猥な言葉を囁かれると、泣きたいほどに恥ずかしくなった。隠せもしないのに身を振って、なんとか彼の手から逃げられないかと悪あがきをみせてしまう。けれど、師匠の縛った縄がぎちりと鳴るぐらいで、ちっとも身体が隠れることはない。むしろ暴れたせいで足が上がってしまい、より大きく身体の中心部分をさらけ出すことになった。

「いやらしいね、モモ。そんなに足を開いて。触ってほしくなった？」

「っ、ち、違います、もうやめてください、縛り方は分かりましたから」

「本当に？後ろ手縛りもできなかった君が、一度で覚えられるかな。この強度だって大事。ほら、もっと全身で感じて」

「んうう...っっ！」

脇腹に巻かれた縄と皮膚の間に、するりと師匠の指が滑り込んできた。人よりも敏感らしい僕の皮膚は、その程度でも身を大きく振らせなければ我慢できないほど感じてしまう。だめだ、これは真面目な修行の最中なのにと、涙目で師匠を見た。せめてこれ以上官能的な雰囲気になる前に終わってほしいと、強い思いをこめて。

けれどもこの状況を唯一打破できるはずの師匠の方が、楽しそうに瞳を細めていた。その目を見た瞬間、僕は一人冷や汗を流す。ああまずい、まずいぞ、師匠のスイッチが入りそうになっていると慌てた。

芸術作品を生み出す人がそうなのか、師匠が特にそうなのかは知らないが、好きなものに特化して技術が向上したのは間違いないそうで、やはり彼の性癖もまた束縛された人そのもの。た

とえそれが僕であったとしても、激しく興奮する材料には変わりないらしい。だから修行の途中に怪しい雰囲気になることはしばしばあった。今日も例にもれず、仕事を放棄し、自分の嗜好を満たす方向に逸れていく師匠を見て焦る。なんとか本格的な行為が始まる前に回避しなければと、僕は説得を試みた。

「しっ、師匠、そろそろ姿勢が苦しいので、写真を撮って終わりにしましょう！長時間の拘束は身体的負荷が」

「かわいいねえモモ。そうやって身体をくねらせる姿がたまらないよ」

「ひっ、う、い、いやこれは、んっ！ちょ、好きでくねらせているのではなく、てっ！」

「敏感な肌を撫でると、とても愛らしい声を出すからたまらない。でもそろそろ、もう少し苦しそうな表情も見てみたいな？」

「や、あ、あっ、ダメです、そんなに触ったら、あ、んんっ！」

でも一歩遅かったのか、師匠は既に仕事を忘れて僕という「縛られた対象」に夢中になっている様子だ。こうなったら口頭での説得では彼を止められない。若干暴力的ではあるけれど、一度だけ本気で抵抗したら我に返った彼からやりすぎたと謝られたことがある。だから力技で抜け出せば脱出可能なのだけれど、その日を境になぜか修行で行った縛り方とは別種の拘束を追加で施され、今回のように絶対に逃げられないくらい縛られるようになってしまった。そのせいで、純粋にプレイを楽しみ始めた師匠から逃げるすべは今のところ皆無だ。

ああ、どうしよう、今日も修行が脱線してっていると、背後から抱きしめられている背中にだらだら汗をかく。

「さあモモ、君の恥ずかしい姿を今日も見せて」

「っ、そ、そういうのは修業とは別では、あ、あっ！？」

完全に修行のことなど頭から吹き飛んでいる師匠は、思うままに僕を責めてくるのが常だ。だから少々暴走気味な彼から、ぎゅっと足を吊るしている縄を引かれた。あまり上に引かれ過ぎ

ると、なんとか地面に付いていた右足も宙に浮いてくる。それを目に入れた師匠は、また追加の縄を持ってきて、今度は右足にも縄をかけていった。

「足がつかなくて辛そうだね。こっちも縛ってしまおうか」

「やっ！？そんな、嫌です、せめて片方だけに」

「暴れないで。君の美しい肌に傷がついてしまう」

「んんんっ...！」

すす...と背中を手でなぞられると、そちらも敏感な僕は感じて何も言えなくなる。軽い触れ合い程度でも、背を反らせて全身の動きを止めてしまう。一度隙を見せたら、プロの技であっという間に縛られて、両足を大きく開いた状態で中吊りにされてしまった。M字開脚のまま空中に浮かぶ格好は、今までされたどの拘束よりも恥ずかしい。

「いやらしいところが丸見えになったね」

「そんな、言わないで、ほどいてください...」

「どうして？とても綺麗なのに。ここも大きくなっているし」

「はっ！？」

しかも僕を縛っただけでなく、師匠はためらいなく勃起している熱を咥え始めた。思わぬ行動に、バッと視線を移動させる。彼からすると、僕の恥部はちょうど立ち膝で座ったとき、顔の前にくるぐらいだ。彼の眼前にある自身を隠すことも、もがいて抵抗することも出来ないまま、さらけ出されたその場所は好き勝手にしゃぶりつかれる。

軽く悪戯で触れているとは思えない舌使いは、明らかに僕を高めようとしていた。じゅ、ず、と音を立てて吸われると、その卑猥さに耳を塞ぎたくなる。けれど決して自由を許さない縄は、腕を動かす権利を僕に与えてくれない。それどころか、擦れて僕の体をきしませるだけだ。ダメなのに、師匠にこんなことをされて感じている場合じゃないのにと、頭では分かる。けれども自分も興奮状態にある身体は、彼からの愛撫に良い反応を見せた。

大きく上下に口を動かされれば、単純な心地よさにうっとりした声が出る。上に登っていった口が亀頭をいじめてくれば、喉を反らして感じ入った。縄に挟まれた玉が優しく揉みこまれると、股間からゾクゾクとした快感が背筋に走って、じわりと先走りが滲む。

「ひっ、う、んんっ、あ、はあ、あ、師匠、そんなに、舐めたらあ...！」

「こんなに硬くして。我慢のきかない身体だ」

「ふっ、ッ、あ、あああああ...！い、や、やめて、くださ、あ、あっ！！」

先端部分を咥えた師匠は、同時に竿の部分の扱ってくる。僕としては、師匠から与えられる快感も強く、かつ拘束されて逃げられない状況にも興奮していた。それに追加で言葉で責められたりすれば、どうにもできないくらい気持ちよくて、泣きながら首を振るしかなくなる。

「いやらしい味がしているよ、モモ。相変わらず先のところは一段と感じやすい」

「んあ、あ、だ、め、先っぽはだめ...っ！」

「亀頭じゃないところを舐めても感じるくせに。ダメと言うなら、先走りくらいはとめてごらん？」

「っ、ひ、で、きな、あ、ああっ！！や、舐めちゃ、あ、んんんッ！」

「感じる先ばかりを舐めてあげようか。モモが素直になれるまで、徹底的に」

「あ、あ、ああっ！！んうっ、や、やっ、そ、な、んんっ、だめ、気持ちよくなっちゃ、は、あ、~~~~っ！！」

無抵抗な僕は、もはや師匠のなすがまま。嫌と言っても許してもらえず、先端部ばかりを執拗に舐められることになった。風呂で綺麗にしたとはいえ、そんな不浄のところ、師匠に舐めさせていいわけがないのには思う。まして、修行の最中に感じてしまうなんて最低だ。

でも一方で、男なのだから、感じる場所を責められたら感じてしまうのも仕方がないことだとも思っている。どちらかという、抵抗できない相手に無体を働く師匠にも落ち度があるのではないかと。もちろんおこがましいので口には出さないが、悪いのは僕だけではないと思う。

ただし悪者がどちらであれ、この状況で分が悪いのは明らかに僕だった。現に師匠に舐められて、身体をまさぐられ、張りつめた熱を温かな口内に収められると、心地よすぎて暴発してしまいそうになる。両方の太ももを抱えるように抱きこんだ彼が、根元まで僕の熱を飲みこんで離してくれない。刺激から逃げたり、彼の頭を自分から引きはがす手立てがあったなら、口内射精は避けられるかもしれない。でも、ここまでしっかり捕らえられていたら、彼の口に放ってしまうのは時間の問題だ。嫌だ、目上の人の口に出すなんてと僕はできうる限り暴れた。それでもしっかりと身体に巻きついた縄は、無常に食い込み足を開かせていくだけだった。

「はううう...ッッ！！っあ、だめ、ダメです、師匠！ううっ、ぎもち、い、から、出ちゃう、出ちゃいますからあっ！！」

「ん、ふ、っ」

「あああっ！んっ、も、もうだめ、ダメダメダメっ、離してっ！っ、はあ、だ、め、やめてください、お願いします、離して、離してええっ！！」

ぎし、ぎし、と軋む縄はひどく食いこむ。フックにつり下げられた身体は、大きな音を立てながら揺れていた。宙に浮いて抱えられた僕には、ほとんど自由がない。それでも彼の口からなんとか逃げられないかと腰が動く。でもそんな微々たる抵抗では、少々腰を揺らめかせることができる程度で、彼との距離は縮まらない。それどころか、暴れるなといなすように、ぐっと喉奥に亀頭を吸い込まれた。そのきつい快感に、僕は目を見開いて身体を暴れさせる。

「くううううっ！！？ッああああだめだめ、それきつ、ッ、〜〜〜ッッ！！っは、いやっ、やあああああああっっ！！」

ー続きは本編でお楽しみくださいー